中等部・高等部

平和週間　戦後 80 年平和への取り組み

佐藤史伸

2025 年、日本は戦後 80 年という節目を迎えた。戦争を実際に体験した方々から直接話を聞くことのできる機会は、年々少なくなっている。一方、世界に目を向ければ、今なお各地で戦争や紛争が続き、多くの人々の日常が奪われている。「戦後 80 年」は、過去を振り返るだけの節目ではなく、私たち自身が今の平和をどのように受け止め、これからの平和をどのようにつくっていくのかを考える時でもある。

自由学園では毎年、中等部・高等部の生徒係が中心となって「平和週間」を企画している。例年は、テーマの設定から登壇者の検討・依頼まで、生徒たちが約 1 年をかけて準備を進めてきた。しかし 2025 年度は、戦後 80 年という大きな節目を迎えるにあたり、これまでとは少し異なる形をとった。学園として、この機会に生徒たちにぜひ出会ってほしい人、見てほしい記録を考え、3 日間の内容を設定した。その上で、実際の運営や進行、講師とのやり取り、会場づくりなどを生徒係に委ねることとした。

10 月 15 日から 17 日までの 3 日間、「原爆の記録映画を見る」「被爆者本人の言葉を聞く」「現在の沖縄から平和を考える」という異なる角度から、戦争と平和に向き合った。

1 日目　記録映像から原爆を見つめる

10 月 15 日、中・高等部の生徒が羽仁進（自由学園男子部 7 回生）監督のドキュメンタリー映画『予言』を鑑賞した。この作品には、広島・長崎への原爆投下後にアメリカ軍が撮影した記録映像を、市民の力で買い戻した「10 フィート運動」によって集められた映像が使われている。被爆直後の惨状だけでなく、戦争が終わった後も原爆の後遺症に苦しみながら生きた人々の姿が記録されている。決して見やすい映像ではない。しかし、戦後 80 年を迎え、原爆を過去の歴史として知るだけではなく、そこで実際に何が起こったのかを目をそらさずに受けとめることが必要だと考え、この作品の鑑賞を平和週間の最初に置いた。

生徒からは、「映像があることによって、話を聞くだけでは分からないことも知ることができた。光や熱線で負った火傷が怖かった」「原爆後遺症に苦しめられる中でも生きようとした人たちの強さや、平和の大切さをより学ぶことができた。これからも戦争や原爆のことを忘れることなく、考え続けることが大事だと思った」という感想が寄せられた。

担当した中等部生は、「今年の平和週間は終わったが、まだ世界には戦争があるということを忘れず、これからも考えることをやめず、向き合い続けたい」と記している。

「戦後 80 年」を過去の出来事としてではなく、現在につながる問題として考える 3 日間の出発点となった。

2 日目　14 歳で被爆した橋爪文さんの言葉

10 月 16 日は、14 歳の時に広島で被爆された詩人・作家の橋爪文さんをお迎えした。進行役は、自由学園女子部 73 回生でドキュメンタリー映画監督の纐纈あやさんが務め、対談形式でお話を伺った。

橋爪さんは、爆心地から約 1.6 キロの場所で被爆された。当時のけがの状態、病院へ運ばれるまでに目にした光景、その後の生活など、80 年前の出来事とは思えないほど鮮明に語ってくださった。特に生徒たちの心に残ったのは、橋爪さんが被爆した時の年齢だった。14 歳。まさに今、会場で話を聞いている中学生たちと同じ年代である。「14 歳の一人の少女に起こったこと」として聞くことで、80 年前の出来事が、生徒たち自身の現在の生活と重なった。講演の途中には、中高混合のグループで話し合う時間を設けた。話を一方的に聞いて終わるのではなく、聞いたことを自分はどう受け止めたのか、隣にいる人はどう感じたのかを言葉にして共有した。そして橋爪さんから生徒たちへ、一つの問いが投げかけられた。

「どうしたら平和をつくれるのか」

担当生徒はこの問いを受けて、「平和と考えると遠くに感じてしまいがちだが、身の回りの温かさなど、小さな平和がたくさんあると感じる。一人ひとりが小さな平和から考え、よ

り平和にするにはどうしたらよいのかを考えて過ごしていけたらよい」と振り返っている。

平和とは、誰かがつくってくれるものではない。自分の身近な人との関係や毎日の生活の中から始まるものなのだということを考える時間となった。

3 日目　沖縄から現在の平和を考える

最終日の 10 月 17 日は、沖縄国際大学教授の前泊博盛さんをお迎えし、「戦後 80 年・沖縄からの警鐘」をテーマにお話しいただいた。

広島・長崎への原爆投下と同じく、沖縄の地上戦と、その後現在まで続く基地問題は、日本の戦後を考える上で避けて通ることのできない問題である。前泊さんは、米軍基地をめぐって沖縄で起きている事件や事故、基地が地域社会に与えている影響などについて、身近な例を交えながら分かりやすく説明された。そして、本土に暮らす私たちが、沖縄で起きていることを「沖縄だけの問題」として考えてはいないだろうか、と問いかけられた。

生徒の感想には、「現在、沖縄でこんな問題があるなんて知らなかった」「沖縄でたくさんの人が事件や事故に巻き込まれ、つらい思いをしていることを知らなかった」という率直な言葉が多く見られた。

特に印象的だったのは、講演終了後の光景である。前泊さんに直接質問したい生徒たちが次々と控室を訪れ、部屋に入りきれないほどになった。帰りの飛行機の時間が迫る中でも、前泊さんは一人ひとりの質問に丁寧に答えてくださった。予定された講演が終わっても、生徒たちの「もっと知りたい」という思いは終わらなかった。

担当生徒は、「学園という小さな社会から一歩踏み出し、日本や世界の社会問題に皆が関心を持ち、何かアクションできるとよいと思う」と振り返った。平和週間が、知識を得るだけではなく、社会へと目を向けるきっかけになったことを感じさせる場面だった。

生徒が運営する平和週間

今回の平和週間は、例年とは異なり、テーマや登壇者を生徒たちが一から決めたものではなかった。戦後 80 年という節目に、学校として何を生徒たちに伝えるべきかを考え、羽仁進監督の『予言』、被爆者である橋爪文さん、そして沖縄から現在の日本の平和を問い続ける前泊博盛さんという 3 日間を設定した。一方、その場を実際につくったのは生徒たちである。講師を迎える準備、当日の司会・進行、グループディスカッション、質疑応答など、それぞれの場面を生徒係が担った。そして何より、生徒たちは与えられた企画をただ「実施する」のではなく、そこで聞いた言葉を受け止め、自分たちなりの問いへと変えていった。

映画で過去の事実を「見る」。

被爆者本人から、その体験を「聞く」。

沖縄の現実から、現在の社会を「考える」。

そして、自分たちはこれから何ができるのかを「問う」。この 3 日間には、そのような学びのつながりが生まれていた。

平和を願う人から、平和を創る人へ

平和週間を終えて改めて感じるのは、「平和を学ぶ」ことを、過去の戦争について知ることだけで終わらせてはならないということである。

橋爪文さんから投げかけられた「どうしたら平和をつくれるのか」という問い。前泊博盛さんから示された「沖縄の問題を他人事にしてはいないか」という問い。そして『予言』の映像が私たちに突きつけた、核兵器によって人間に何が起こるのかという事実。それらはすべて、今を生きる私たちへの問いである。自由学園ではこれまでも、「平和を願う人から、平和を創る人へ」ということを大切にしてきた。平和を願うことは大切である。しかし、願うだけでは平和は創られない。自分とは異なる人の言葉を聞くこと。知らなかった事実を知ろうとすること。身近な人との関係をよりよいものにすること。社会で起きていることを「自分には関係ない」と切り離さないこと。そして、知ったこと、感じたことから、自分にできる小さな行動を始めること。その一つひとつが、平和を創ることにつながっていく。

戦後 80 年。

戦争を直接経験した世代から、その経験を直接聞くことのできる最後の時代を、私たちは生きているのかもしれない。だからこそ、聞いた私たちには、それを受け取り、考え、次へと手渡していく責任がある。

今回の平和週間が、生徒一人ひとりにとって「戦争について学んだ 3 日間」にとどまらず、「自分はどのように平和を創る人として生きるのか」を問い続ける出発点となることを願っている。